

俳句の中の鳥獣戯画（二）

池田亮二

松茸や一本で足る男振り 井上井月

餅搗や恥しながら婿と嫁 井月

井上井月は、明治という文明開化の世になっても黒紋付小袖に袴の尾羽打枯らした浪人姿で信州伊那谷に滞留しつつ俳句行脚し、一人芭蕉の道を歩いていた孤高の俳人です。乞食井月といわれながら無欲で、二銭三銭の点句料を貰い「千両千両」といって喜び、見かねた人から新しい着物を贈られても寒がっている乞食がいるとくれてやってしまう。そしてただ金は貰わず、必ず句や書で返礼した。

右の句は祝い事があった家の主への祝ぎ句という。男児出産を祝っての句で、松茸は男の見立てで、「一本で足る」は「一本出たる」とする本もあります。餅搗も何かの隠喩です。ご想像あれ。

落栗の座を定めるや窪溜まり 井月

そして明治十八年、伊那村の路傍にボロをまとい糞まみれになって倒れている井月が見つけれ、翌年二月、すすめられた焼酎を一なめして往生したといえます。これはその最晩年の句です。井月の存在とその句が知られるようになるのは、大正十年に初めて句集が世に出てからです。窪地に埋まった落栗は死後三十四年の後になって芽を吹いたのです。

井月より約半世紀遅れて、昭和の行乞俳人山頭火の晩年の句に、

日なたしみじみ石ころのやうに 山頭火

があります。山頭火は井月を非常に身近に感じて伊那谷の井月の墓に詣でもいます。落栗の井月、石ころの山頭火は似たもの同士のようにです。

秋風や屠られにゆく牛の尻 漱石

この句にだまされる人も多いでしょう。うら寂しい枯野道を屠所に曳かれてゆく牛の恨めしげな哀願するような眼、悲しい鳴声が聞えてくるようです。

ところが添え書きによると「痔を切って入院す」とあります。牛の尻とは漱石先生自身のことでした。たしかにあの時代、痔の手術だからといってバカにできない大悲劇だったかもしれないけれど…。鏡子夫人も涙を流して見送っていたのでしょうか。

**猫も聞け杓子も是へ時鳥**

**漱石**

これを見立ての句という、笑う人と怒る人と半ばするかもしれません。

明治二十八年、松山中学の教師をしていた漱石の家に子規が勝手に住みついてしまった。漱石が二階、子規が下にいる。そのうち子規の門下生やら俳人仲間が大勢やってくる。六畳の部屋に布団を敷いて、子規が寝たり起きたりそれを囲んで二、三人、多いときには五、六人が俳句やら俳論で佩々諤々やっている。漱石は本を読むこともできません。やむをえず一緒に俳句を詠んだといいます。その頃、子規に寄せた数句の中にまぎれこませてあったのがこの句。子規はどう読んだでしょう。時鳥は、ホトトギス、子規…。文芸雑誌「ほととぎす」が発刊されるのはこれより数年先ですね。

もっともこれを機に漱石はミイラ取りがミイラになったごとく、俳句にのめりこんで、おびただしい句を子規に送りはじめますから、彼自身、猫、杓子の仲間入りしたことになります。